

仁尾の誇りを 伝承する

仁尾竜まつり実行委員会
仁尾雨乞い竜保存会
仁尾雨乞い竜実行委員会

『雨乞いじゃ、
そおれ竜に水浴ぶせー!!』

毎年8月の第1土曜日に開催される仁尾竜まつりのメインイベントで登場する稲わらと青竹で作った『雨乞い竜』。今年は3年に1回の新調の年にあたります。一度途絶えていた伝統行事を復活させ、引き継ぎ、次の世代へ伝承していくのは、平均年齢70歳を超える仁尾雨乞い竜保存会と仁尾竜まつり実行委員会を中心とした人たち。

三豊市が誕生してから5年。各地区で盛大に行われている祭りのあり方を考えていく中で、特に市民力が発揮されている代表的な祭りの一つが仁尾竜まつり。半年も前から準備に掛かり、週末ごとに集まって、竜づくりに携わる人たち。彼らの心意がまつりを盛り上げていきます。





◀ 50年ぶりに復活した雨乞い竜
(昭和63年瀬戸大橋博覧会)

仁尾の若者たちは代わる代わる樽を担いで休みなく走りました。

願いが届き雨が降る

和蔵は、早速その水をわらの竜にお供えました。そして百姓たちは大きな竜を担ぎ、□々に「竜に水浴ぶせ、竜に水浴ぶせ」と叫びながら村中を駆け巡り、村人たちは家の前で手桶に貴重な水を入れて待ち構えて、竜が通ると水を浴びせ

50年ぶりに復活

仁尾町では寛政11年以来昭和14年まで140年間大干ばつの度にわらで作った竜による雨乞い神事が行われていましたが、その後の社会事情の変動により、この神事も途絶えていました。その後昭和63年、瀬戸大橋博覧会が開催された時、この仁尾雨乞い竜が50年ぶりに博覧会のイベントとして復活。それを契機として仁尾竜まつりを開催し、永く伝統民俗行事として伝承していく事になりました。



▲昭和14年干ばつ時の雨乞い竜

1. History

その起源は寛政の大干ばつ

江戸時代に始まったとされる雨乞い竜。昭和14年を最後に途絶えていたのを瀬戸大橋博覧会のときに復活させ、現在に続いています。

全長15間(27m)の巨大竜

高温少雨の瀬戸内海気候の仁尾は古くから干ばつに悩まされてきました。

寛政11年(1799)夏には、まれにみる日照りが続き、ため池の水は枯れ、井戸の水も底をつき、稲は今にも枯れかかろうとして

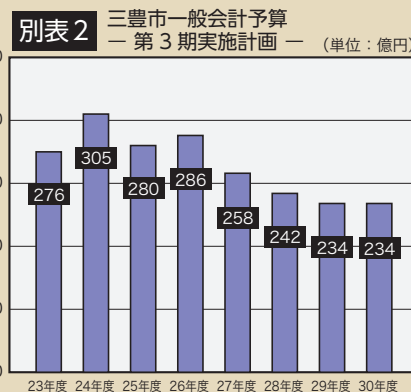
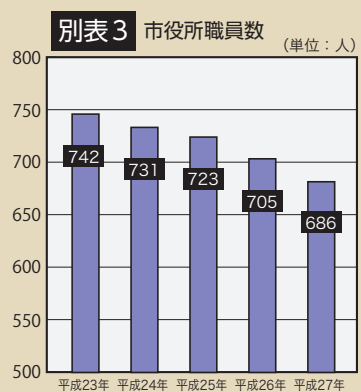
困り果てた百姓たちは、笠岡村(現豊中町)の行者和蔵に相談。和蔵は全国各地を巡り歩いて修行した偉い修行僧で、中でも雨乞いにかけての靈験は広く知られていました。和蔵は百姓たちに「わらで大きな竜を作り、それに伊予の黒蔵洲から汲んできた水を掛けて祈ればよい」と教えました。

百姓たちは早速、雨の宮神社の前に集まってそれぞれが持ち寄った麦わらで全長15間(27m)もある大きな竜を作りました。

水は10里離れた川之江から樽で

一方、黒蔵洲からの水運びも大変でした。黒蔵洲は古くから竜が棲むと言われる大きな洲で、仁尾から10里(約40km)離れた伊予川之江(現愛媛県四国中央市)の山中にありました。

一斗樽に汲んだ水を運ぶ際、途中で止まるとそこに雨が降ると言われたため、



別表1 平成22年度市内の主な祭り・イベント補助金等交付状況等 (単位:万円)

事業名	三豊市補助金額	総事業費
諸之丞まつり	325	630
高瀬空射矢まつり	397	660
仁尾竜まつり	203	485
たくま港まつり	548	1,040
仁尾八朔人形まつり	244	419
やまもと爽郷祭り	361	443
とよなか秋のまつり	49	142
どぶろくまつり	61	64
三野町イベント推進協議会 (よしづ花まつり、大坊市、弥谷市)	130	171

※1万円未満は四捨五入で表示しています。

る」「寄付金集めが難しくなってきた」「存続に不安」「若い人は合併した時点で祭りは地元でやるつもり」「経費が足りない」「見直しの時期にきている」など、たくさんの意見が交わされましたが結論には至りませんでした。また、市役所の職員も、現在の742人から5年後には686人に減少する(別表3)中で、各祭りを開催するために自主運営化の必要性も検討されました。

どの地域でも祭りに対する思いは同じ。「地元を盛り上げたい」「多くの人に参加してもらいたい」「年に一度、みんなで楽しめる場所がほしい」など、地域「コミュニティ」を大切にしている人たちの熱い思いが祭りを盛り上げています。

三豊市の祭りを考える

仁尾の歴史を復活させた仁尾竜まつりをはじめ、三豊市には旧町単位で開催してきたイベントとしての祭りが、毎年、盛大に開催されています。市民が参加しての踊りや太鼓の演奏、地元特産品を販売する各種バザーなど、どの祭りもたいへんな盛り上がりを見せています。しかし、祭りの開催には、予算が必要になってきます。祭りの予算は、地元企業からの寄付金や個人の負担金、市からの補助金などで賄われています。(別表1)

合併から5年が経ち、合併特例もあと5年で切れます。平成23年度の一般会計予算は276億4,000万円。合併特例が切れる平成28年度には242億円と5年間で35億円弱の予算の縮小が求められています。(別表2)

また、平成19年11月には、三豊市行政改革推進委員会から出された「補助金等の見直しに関する答申書」の中で、祭りについての提言がありました。そんな中で、今後の祭りのあり方を検討する会が開かれました。

昨年2月と11月に、市内の主だった祭りの実行委員会の代表者が集まり、祭りの実施体制や今後の方向性などが話し合われました。これまで祭り実行委員会の主な事務・運営は支所事業課で行ってききましたが、事業課の廃止に伴う祭りの運営体制の変更がうまくできたかどうか、話し合われました。意見としては「市で一本化するが順番でまわすか」「山の方と海の方と2つにまとめる」「市外へ市の顔となる祭りやイベントがあればいい」「市で一つの祭りになると、会場となる中心部はいいが遠く離れた地域では何のかかりもなくなってしまう」「実行委員会が独自で企画・運営している祭りもある」「寄付金集めが難しくなってきた」「存続に不安」「若い人は合併した時点で祭りは地元でやるつもり」「経費が足りない」「見直しの時期にきている」など、たくさんの意見が交わされましたが結論には至りませんでした。また、市役所の職員も、現在の742人から5年後には686人に減少する(別表3)中で、各祭りを開催するために自主運営化の必要性も検討されました。

仁尾雨乞い竜保存会
会長
曾根 満さん
(63 歳)



3年にいっぺん作り替えよるけど、いつもみんなに気持ちよく担いでもらえるように思て作っとる。10数年前には竹細工の学校に行ったこともあったけど、竹を扱う技が広がったら、いろんな事が楽にできるようになった。この竜作りも生活の一部になっとる。まあ自己満足やけどな(笑)

みんながそれぞれの思いの中でこだわりながら作っとる雨乞い竜を、それぞれの見方で楽しんでもらいたい。

仁尾竜まつり実行委員会
竜部会部長
曾根 修さん
(62 歳)



仁尾竜まつりは香川県を代表するような祭りに育ってきとると思うけど、心配なんはメンバーの高齢化。うろこ作りしとる仁尾おどり保存会の人たちも同じ。次の世代への引き継ぎが一番の課題かな。

復活したときから携わっとるけど、さぬきの日照りの大変さは百姓の原点・人間の原点だと感じている。この雨乞い竜を通して、水のありがたさを新たに感じるとともに、子どもたちに水の大切さを教えていきたい。

今回作る竜は、3年前よりもあごを出して、鼻を大きくし、ひとまわり大きく製作。もうすぐ完成の時を迎える雨乞い竜は、仁尾の町を練り歩く日を、今か今かと待ち構えています。

今回作る竜は、3年前よりもあごを出して、鼻を大きくし、ひとまわり大きく製作。もうすぐ完成の時を迎える雨乞い竜は、仁尾の町を練り歩く日を、今か今かと待ち構えています。

魂を込める 頭づくり

このうろこは全部で1,600枚製作します。一人が朝から晩までがんばっても20〜25枚しか作ることができないのでおおよそ2週間はこれにかかりきりになります。



▲手際よくうろこを編む仁尾おどり保存会の皆さん

◀稲わらの束を何重にも編み重ねて頭が形づくられる



竹を割るのにも熟練の技が必要

3月初旬に竹を切り出すことから始まる

3月初旬、製作は市内の山林で材料となる真竹を切るところから始まります。直径10cmから15cmぐらいまでのまっすぐに伸びた竹を選び、切った後は枝をはら

雨乞い竜は、仁尾雨乞い竜保存会(会長 曾根満さん)と仁尾竜まつり実行委員会竜部会(部長 曾根修さん)の人たち約30人が中心となって製作します。平均年齢70歳とは思えないほど、元氣いっぱいのヤングシルバーです。

製作するのは平均年齢70歳のヤングシルバー

華やかな祭りとは対照的に、地道な作業で5カ月かけて作る雨乞い竜。うろこ一つにもこだわりと伝承された技が光ります。

先人から託された 仁尾の誇り

2. Handmade

コツコツと地道な作業が続く

製作は仁尾サンシャインランドの跡地で、毎週日曜日に開催されています。

3月中旬。まだまだ寒さの残る日曜日の早朝。まずは、切り出した竹を、竹割り器と呼ばれる道具を使って、三つ割りに四つ割りにしていきます。割った竹は、内



側を削って薄くし、加工しやすくします。この竹を薄くするという何でもないような作業も、きちんと竹の目を読んで鎌の刃を入れないと、薄すぎたり、厚すぎたりして使い物にならなくなります。

稲わらは、軸を残して葉の細い部分を取り除きます。たいへん手間のかかる作業ですが、この作業をするこ

うろこの数は 1,600枚

うろこは、仁尾おどり保存会(会長 森幸子さん)の皆さんに任されています。メンバーは女性ばかりの47人。長さ80cmから1mに切って細くした竹に、稲わらを水に浸して柔らかくしたものを、丁寧に編み込んでいきます。編み上がる、ちやうど大相撲の力士が化粧まわしにつけているさかりのような形になります。これを曲げて、結びつけると、見事なうろこの形になります。



▲丁寧な作業が竜の仕上がりを左右する

5. Festival

**新調された竜で
いざ参る!!**

今年で24回目を迎える仁尾竜まつり。ひしよぬれになること間違いなしですが、皆さんも担ぎ手として、また、竜に水を浴ぶせて、祭りを楽しみましょう。

当日は、仁尾小マーチングバンドの演奏や踊りコンテストで盛り上がり、おまつり広場ではたくさんさんの屋台が建ち並んで地元海産物の鉄板焼きなどで訪れた人を楽しませてくれます。

メインイベントは稲わらと青竹でつくった雨乞い竜の「水浴ぶせ」。当日参加者も含む約130人の担ぎ手の「雨乞いじゃー!!」のかけ声にあわせ、沿道の見物客から竜めがけて一斉に水が浴びせられます。

雨を呼ぶだけでなく、暑い夏を吹き飛ばしてくれる仁尾竜まつりにいざ参る。



3. Succeed

少しずつ次の世代に 受け継がれる伝統

今年初めて、仁尾中学校の生徒がうろこ作りに挑戦。伝統の祭りに少しでも携わることで、地元を愛する心が芽生えていきます。

仁尾中学校の2年生59人が竜のうろこ作りに体験しました。うろこ作りには、仁尾おどり保存会の皆さんが稲わらの編み方を手ほどき。2時間で約200枚のうろこができあがりました。小さいときから、竜に水を浴びせることで祭りに参加していた生徒たちも、竜の製作に携わることで、地元の伝統を肌で感じる事ができたようです。



▲伝統を引き継ぐということは世代を超えてふれあうこと

**見るもよし!
担ぐもよし!
浴ぶすもよし!**

**誰もが参加できる今年の竜まつりは
8月6日(土)**

第24回仁尾竜まつり 仁尾庁舎周辺

午後4時～ 仁尾中学校吹奏楽・仁尾小学校マーチングバンド

午後4時30分～ 踊りコンテスト

午後7時45分～ 雨乞い竜の水浴ぶせ

▶問い合わせ 仁尾竜まつり実行委員会 (仁尾支所内) ☎ 82-5100



4. Interview

**私にとっての
竜まつり**

仁尾竜まつりは、竜を製作する人だけでなく、たくさんの方が祭りに参加し、多くの方が祭りを楽しんでいます。

見るより担ぐ方が何倍も楽しい

藤田謙一さん (50歳・観音寺市)
毎年、竜を担ぐのを楽しみにしています。昨年は子どもと参加しました。見るだけより担ぐ方が楽しい。

祭りの日が待ち遠しい

喜田実未さん (仁尾小6年)
新体操クラブで踊りコンテストに参加しています。大勢の人が見に来てくれるので、祭りの日が待ち遠しい。

担ぎ手の威勢のよさも魅力

写真愛好家 千秋勇さん (71歳・豊中町)
水を浴びながら練り歩く竜の迫力や担ぎ手の威勢のよさなど、伝統の祭りを写真に残し、全国に知らせたい。

踊り子にとっては最高の舞台

どしたさん (よさこい連) 森實雅美さん (32歳・観音寺市)
竜を背に踊れる広い舞台と踊り子みんなで練り歩く流し踊りは最高!!

年に一度 みんなが一つになる日

吉田晴義さん (95歳・仁尾町)
子や孫がいつも楽しみにしています。みんなが一つになって楽しめる祭りを永く続けてほしいです。